

雙魚書日載

二十八

大正三年十二月中流起筆

特別
14
1919
277



変面(本)の載

大正三年十二月十二日起筆

○先以甲申光顯伯を割奪を得たる
 玉川南正子につきて杉山合志とて其歴
 を云々する夫又の香岡利村其弟とて
 リ前々たる其確信に此合志を弁したる挨拶
 此又の方面を言及する、此合志とて
 伯もも余も言及せんは其状もあらず三
 子も一合志と合志たる時と合志子の其歴
 おりつる合志し、其合志の合志をぬれ

も物の中にも好箇の紀念とするべきと思ひ
等居に余りの物に記を改むべきなり
古紙の字も其れを喜甚し家記
する事とさるる、付の固者智く字記し
此に附して保存するも亦可也
○洋書家川村清作の三冊年早給
田大子に於て一大命額と考へる
記しる事し全紙の名紙に油絵の具を
以て年中所すの人物を描く事
もその二枚紙の全紙を神に物を
指す圓紙紙と云ふ文を云ふの圓紙に
此人の物微を記し押しをかしらし

此れ七と四能村並へのついでに日本書と答
ぶなり油絵の具も古紙の紙をわのす
る一紙のぬり二枚全紙に新紙の額
にさすべき歎
○内府の書名に寺をさす事し
形勢の三文字額を必んことを余り味
わらん懐古の字を集めて之れをさると
せし七懐古の字を肉枕度額字にあらせ
るる事し院の二字得てこれに己を
得る院の字を懐古の書下書と集めて
て減るなりなりも而して終る大師流
の額字と必んとぬると書し一月其

の筆の書と物もせしむる本新深の書指本
概言寺位職福田循誘大師依り於て高
代中一と云ふ評ありて付人を依りてせん
依りてし高き書出来んは流石に額
まを心ま増ん等と云ふと殊に肉太書
きりんハ、さこころの記又と云ふ古も更さ
く出来たり筆の書と出り出るんことをお
せんといふ勅本と心うせんとも添くを老ハ
さんとう自合古せん満を志し標ゆ記
みしと南ありて老しと云ふ因に云ふ福田
と細字にむも中北人の手と成りて言記
殊にめをえの但し此記をて細字をて

前のこととて美らさうと云ふものあり大字を
元字とせんぬり也 (十二月十二日記)
○河内田中一頁(其名義整ふて重田書館
夫)が甲申相江のありあつたことと云ふおもしろ
く甚しむる名義の相江の書向と刻さるる
所一頁とひとて古一頁の元り此に執
筆一に相江の依りて記すことと云ふん
よりて云ふと相江の依りて記すことと云ふ
した所とて但書の筆をて記すことと云ふ
又その中肉書と云ふことと云ふことと云ふ
をいんうく書(云々)をしめて一書し、せんうめ
目録とて依りて記すことと云ふことと云ふ

を以つて、甲申一月を以て此の故より、方改て
清の池田村大屋寺より、此の相にの巻を
訪ひ、其位牌を拜し、此の寺にて、そのゆきと
評し、よ、四元、出羽、在由の言え、一字、丁、に、報
道し、きつたと、とう、一字、丁、の、長、と、ひ、と、一、あり
て、き、く、コ、ン、な、吉、面、を、き、し、と、き、あ、を、示
せん、このを、見、る、も、け、る、も、い、何、と、い、は、る、の
所、つ、ち、る、も、あ、る、の、好、な、る、も、多、く、こ、い、え、侍
と、せ、侍、も、い、ぬ、の、さ、う、く、と、ま、す、と、

桐江先生略傳

桐江先生、姓田中、名省、字省吾、一字宗魯、號

雪華道人、通稱平右衛門、出羽莊内藩士、田中
一信第六子、少小去國、遊於江戸、受兵法于山

鹿、以、藤、助、慷、慨、使、氣、後、折、節、讀、書、以、儒、業、仕
甲斐侯、柳澤吉保、與、物、徂、徠、親、善、是、時、侯、有
嬖、臣、為、人、佞、諛、陰、賊、流、毒、上、下、先、生、不、耐、憤
懣、投、間、刺、之、匿、徂、徠、家、徂、徠、潛、使、安、藤、東、野
山、縣、周、南、等、護、送、出、江、戶、先、生、遂、韜、迹、於、陸
奥、更、改、姓、富、名、逸、字、春、叟、一、字、日、休、號、桐、江
又、富、春、山、人、寓、仙、臺、與、高、僧、豪、士、交、享、保
中、去、之、攝、津、住、池、田、邑、集、徒、教、授、方、是、時、海
内、向、物、氏、之、學、徂、徠、及、門、人、稱、揚、先、生、詩、筒、往

復、歲時不絶、而先生詩名震于京攝之間、邑
中子弟爭從受業、所著有東海漫遊稿、樵漁
餘適、寬保二年六月歿於隱所、享年七十
五、葬邑之鹽増山大廣寺

大正三年十一月

桐江先生長兄裔孫 田中一寧 謹誌

新又... 有... 父祖人の
... 相以有
... 山腰... 大廣寺...
... 秋...
... 山つ...
... 刺...
... 幼...
... 池...
... 相...
... 出...
... 出群の

歳元と抱えんと而して終を絶し名を絶しん
此の提山に日月と交とせしむる 妙の音に
たしとて切つてしむる 妙の音に亦先しと
已に地中のまも思ひくつり 妙の音に此の地も
と切しんまも改に沖の心地も以て 妙の音に
の地を改せしむる 妙の音に一片歌の地
ゆに山を思ひくつり 妙の音に
七十有五年の生涯を送りおつる 妙の音に
：眠えしんまも思ひくつり 妙の音に
まも思ひくつり 妙の音に
強、まも思ひくつり 妙の音に
まも思ひくつり 妙の音に

遠のこみぬまも思ひくつり 妙の音に
親しく申ひき今田かたのまも思ひくつり 妙の音に
のまも思ひくつり 妙の音に
こも思ひくつり 妙の音に
まも思ひくつり 妙の音に
つらまも思ひくつり 妙の音に
位神田のまも思ひくつり 妙の音に
へまも思ひくつり 妙の音に

身とくまも思ひくつり 妙の音に
午後十の内こも思ひくつり 妙の音に

改竄せしめざるを以て範圍の方式は
此れを云ふことなし茶人をして
動の一字を一挙一指に要するに
あらず度おひ秋の物とあり上げし
に據りてしとどにこゝろなき趣あり
うとう茶人たるはたのるまゝ鏡き
をらすことありとあり凡人の
をさくことありとあり凡人の
ものありしとありとありの
取中の古材をえりまゝし
の用は終し味をある
をさくことありとあり凡人の

此れを肝要とすを以て
とす^{（意）}此れを肝要とすを以て
甲^{（意）}此れを肝要とすを以て
へきやと茶人の
えり出さんたる各茶人の
の^{（意）}此れを肝要とすを以て
以上の味とありとあり
せのめ^{（意）}此れを肝要とすを以て
このを茶人以上とありとあり

一 和紙の活用

和紙をさくことあり自身に
とも、其の味とありとあり

位也と有画の女は...
九等筋の紙の葉...
也

一 おも銘を附する事

元めくも...
早く支...
人...
其物の致を...

上...
やま...
補く...
君...
漢語を用...
へ...
茶...
附

の茶人といふ名を大印するものこそ又
そのと敬重する早の政儀の御孫御存する
川守、茶人の数りりたる地主人の今
や主人とす。四民世と云ふんとするもの
なり

一 茶歴を考ふなり

物の茶歴を考ふはことと歴史を示んする
四民世より云ふ然るも道なりと記し此
の四民世を考ふ押ししるる茶
人より同一の茶なるも傳来するもの
と無きもの之は傳るは月野の茶人
●この茶の湯道なりと云ふるは



ハ茶古くは自らうと茶も禪も
一茶ありと云ふものありあり
子も名家の花押なりしもの
政界に於ては茶の歴史の
考へ茶の歴史、こと
の確たることと云ふは
一茶ありしことも茶の歴史
の歴史を推し換へんは
志を執味とすもの物に
史的執味を味ハしはるる大の
吹ふと云ふ茶人なること

下、おら茶湯をもとまるといふは、単にじら
属する茶室の内の人の利便のみが
す。既ちんもわいし高きん後を
す。若し茶室の利便のみが所
以と決し、狭き範圍にとまると
こと勿論、その事歴を考ふこと
も、利便を可とするを、女を慕ひ
と思ひ、女に愛する、こと、
いと其人の事、と人とは、
往ある味を生す、又茶室に
へん、凡の上を要する、
をいし

一書、其の貴きを教へる、
茶室の利便を、
ゆえ、茶室を、
助け、茶室に、
中を、
此の、
の、
例、
代、
の、
界、
の

こゝもゆく貴き便を以つてその山家さうし
ゆとさうせんかそそ末えあをさうの名徳の事
語や書山や日を上代の歌切の目録に
刻合の多くは保石をさる又と保石保石
さうし書とさるるるる

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

あををあらぬ指廻をさしこゝ二 三 四 五 とあ
ぬ指廻をさしこゝ二 三 四 五 とあ
くあふこゝ二 三 四 五 とあ
る二 三 四 五 とあ
をあふこゝ二 三 四 五 とあ
こゝのあふこゝ二 三 四 五 とあ
外にさうしこゝ二 三 四 五 とあ
一程の体韻のゆるせこゝ二 三 四 五 とあ
とあ人の心うゆるるるるるるるるるるるる
心うゆるるるるるるるるるるるるるるるる
こゝ二 三 四 五 のあふこゝ二 三 四 五 とあ

あををあらぬ指廻をさしこゝ二 三 四 五 とあ
ぬ指廻をさしこゝ二 三 四 五 とあ
くあふこゝ二 三 四 五 とあ
る二 三 四 五 とあ
をあふこゝ二 三 四 五 とあ
こゝのあふこゝ二 三 四 五 とあ
外にさうしこゝ二 三 四 五 とあ
一程の体韻のゆるせこゝ二 三 四 五 とあ
とあ人の心うゆるるるるるるるるるるるる
心うゆるるるるるるるるるるるるるるるる
こゝ二 三 四 五 のあふこゝ二 三 四 五 とあ

石におもしうく覚ゆる所もつる是れあり井伊
大老の一家の榮を一生一代と心得よと云ふ一節
をいふ前は自分より吉岡をいひて●と●因
り於て其れを致せり、命散りて後の言文の
心ゆるむもめりまおかしうく感せらるる所
に、女ちうこちらとをこいふ物ありて言ふ
に、氣を起つれ

先づ井伊直虎の骨董並に味あつしこと
此れ也

骨董並高の古えらふは、まきとるも、つる現伯
骨の祖父直虎ちも、つるしゆを命を今つる春深
木部のさむせりしう口く、琴城して曲神の

際出入の骨董並高の古えらふは、まきとるも、つる現伯
に、陳列し大老の言文をいひて、石をいふ通に、こ
を待ちまきけり一節をいひて、あつる物ありて、其
陳列まきけり、あつる骨董並高の古えらふは、ま
きとるも、つるしゆを命を今つる春深木部のさむ
せりしう口く、琴城して曲神の、骨の祖父直虎ちも、
つるしゆを命を今つる春深木部のさむせりしう口く、
琴城して曲神の、骨の祖父直虎ちも、つるしゆを命を
今つる春深木部のさむせりしう口く、琴城して曲神の

大老の書書と、御涙あつしこと見つるや
直虎の書書と、御涙あつしこと見つるや

くまの味多きの御菓の膏うしとたうらふらんを
物飾り草麦丸八貞丸とまき石の多き物も
まきり挨拶の都丸もよきまきり理うしま
仕易きうらまきり物めくめとまきり
湯通の上うらまきり品を元かく飾り千前草
まきりまきり茶湯の紋の成くまきり
まきりまきり南坊言まきり利休の懐
石日記とまきり利休へも奥書とまきり
の利休まきり年中毎まきり品飾り
まきりまきり物者まきり心得り候
面上に物思おまきりまきり候まきり
まきりまきり日之田書はまきり内心の

飾きは引物くまきり物まきり候
所作飾り置合ての政まきり候
まきりまきり候とまきり候まきり
物も引物を引物飾り千前草
心を引かく物めくまきりまきり
本まきり

一まきり又まきりまきりまきり
得友と物し心の物まきりまきり
まきりまきり物飾りまきりまきり
まきりまきり不流まきりまきり
也
宗親まきりまきりまきりまきり

日中細かなりての心方一二ヶ条何し細心の研定
味ありし

生花たるの轉る形老後意と氣
の專あるしと云ふゆゑも毛かたりうづらひ
行くもさるんば永くと目とをいひえん又さ
きとのあつちを挨拶する人主史をも再
んてさしりつる

と云ひは流るるを成と云ふも順次下
きと云うけ流しすんきを説きとせ

千家よりちるるを成と申さるる中く流すも
あるをさる大の好む候大切の神奈大切の
茶の成と申し申さるるを流すもさるる

粗おのあらひるる、香を移しし香を成と下
りまきと成すも同き

と云ふ又粗おのむけさるるの條

粗おを早くもむけまきと云ふは成りぬ
るるあつちの好むもむけさるる

の香を成すを成と云ふる人ひさるる
て可なりり的事を云ふ一二其の義を
こは梨園のゆゑに云ふ極の代に早
く成りぬむけまきと云ふ、我梨園の
は梨園代其の義を記を引用して載つ
るる、らんをぬるるを云ふことある

又抄録とておく

博覧できまう元禄年中桂昌院大夫八景山
北清園へ入瑞ありけるの大石身石大夫入瑞
歩行の为り危しとて大概元拂り了却月と
ほそく其石根の馬坊相成の迹其の文書
くくえん海けを所くおろく、積りて石
ふじのぬし北の石をのり一書しけりぬ
又身保中一太森元次り三木式右二つ
余をいん潜るあ候の思ひしう池いふ名所
一のみの春木七石飽杖を伐り拂ひたふあ
の迹の石志を崩し城を築き寄る皆元拂
りん古木方丈伐拂り了残り木石とてわ

僅きし北の古木身石皆散乱す
記しゆり古の自境残りしものも一屋山
の迹は城の跡ありて西行を西洲堤
山月標に記し遊りの澤標校根山、硝子茶
庵に記し遊りし跡ありて西行を西洲堤
の跡結たつる変り、以上跡ありて大抵石
門跡形ありて後集ありて入りてる類
あり大の朱之瑜之を書き、御細工人太
田ん花を具とて以て文書を遺す

えん伝る元禄の跡をいふし
跡ありしものも元禄の跡をいふし
若し七ありしとて存するものも

地をなすはなれ御事とて随分の割の割と
 して昔一と遷徙せ給ふ事とぬとのころ
 尋常又烈公の所府城南の地に借楽園と
 起し何地もとす事あるや左のわら
 を背古好の歌のゆり割しやるゆをを
 此は家の所花に記す之草の毛家なり寸
 杉屋も紙とあ似てのくくす事と華
 七強人と相同じき事あるん心余に私
 を寸杉屋も紙と唱くそなり其歌
 大河内躬恒の

世をすくし山又よ人山をそも

從ふうきめさつち行らん

とすくす者りし今を義公の隠栖りし
 田西山の宮りて油さすそをも奈人の一
 尺しと垂逆を替ふる能はる事ありし
 烈公の何地もとす事あるや左のわら
 軒と題する命歌を掲げ其歌而一
 首の歌を古きと交せりしが是れを即ち
 彼の毛紙の躬恒の歌を掲げたる事と
 世をすくし山又よ人山をそも

從ふうきめさつち行らん

此もあつてさる事ありし烈公の人とありし
 不のめさつちくく改味あると見え
 くらう心のそん花をそも

又そのついでに鏡のちげんは

佛取燈の迎に佛燈を懸らての礼、去法
列にきき所のるも、お七しりし

(十二月十日録)

○古河家子孫の元暦著書とつき前書と由年
の大略を記し、一五しう今又予尾の著書と
記し、一層著書と記し、皆其年並に著書の時を載
せしむる多し、お世す

抑北元暦著書の集は、今を鑑ること七十九年
前右に所載の時集と著書人の校合せし、集
集七本、一しし全部二十冊の古河家、十

四冊の極川宮家に四冊現在し、其他二冊は
り、散逸せし、一しし、一しし、一しし、一しし、
あり、完備せし、所記の由、一しし、一しし、
有極川切又、一しし、一しし、一しし、一しし、
者、向し、一しし、一しし、一しし、一しし、
の十四冊は、全部通計七十八十三、著書の重保
十三、一しし、一しし、一しし、一しし、一しし、
が、其年、一しし、一しし、一しし、一しし、一しし、
一しし、一しし、一しし、一しし、一しし、一しし、
蹟、公卿、一しし、一しし、一しし、一しし、一しし、
三冊と、著書の、一しし、一しし、一しし、一しし、
一しし、一しし、一しし、一しし、一しし、一しし、

享保三戊戌菊月下浣

神田道伴書判

此筆あり就と云ふありて行々の筆跡有り
其に此書多集元暦時代の者家々寄合者
きししを曰明代の人う校合せしありて
その後あるも亦二冊寐蓮法師の者是し
其と云ふ一冊とを比較すれば紙質も字
體も明の代のお趣を示して大體元
暦以前の筆跡なりと因らんとて候と
まう書内省御親不大に頼二氏之物
とんを元暦多集私るる書と云
ふの其中左の一冊なり

古河家宛の十四帖の筆あり享保年中は
古筆の家神田道伴の書とせしものを行
成公使後頼寐蓮光俊宗号親王の上
へまうとせしんをまのやの光俊宗号親王の上
人の元暦以前の人多くある者の筆ありて
七つあるものも古筆と改しつらうと候は
侍の四人のいふにといはんとせん二何の流左も
何れも何れも唯書なりと云ふもおはし
現定しつらうとせんとせんか
と云ふ古筆の家大方時代の者所を究め
まう書なりと云ふも鑑定を下すもの
まうか四の是に道伴の候と云ふものを

徳の古筆の家、宗号、親として有柳の切の名
を附し、才十四世、道伴、光俊と言ふ名
は、徳の古筆の家、源順入の世号、伊佐と
罪波切の名を附し、道伴、又、ある所の
代に、花輪の年、のまら、を、斯くの如く
時代と、附し、決り、考き、結さ、る、と、ある、ん、や
余、の、由、縁、一、等、と、ろ、ん、あ、る、ん、本、書、の、元、暦、の、う
る、年、を、う、り、前、の、う、ん、の、古、筆、を、と、お、基、の、し、
校、定、せ、る、ん、と、せ、の、う、ま、の、由、の、才、二、世、の、ある、改
に、附、け、う、と、な、う、け、ん、か、何、人、の、之、を、補、う、と、し、し、の
ま、ん、徳、の、流、石、の、料、の、一、お、く、元、書、を、

ある、徳、の、古、筆、を、か、き、う、り、元、書、を、う、り、
徳、の、古、筆、の、代、も、今、の、徳、の、流、石、と、言、う、か、之、古、筆、の
は、所謂、法、性、寺、頼、り、し、り、一、元、暦、の、代、の
に、あ、る、う、り、こ、と、ろ、う、あ、る、う、り、と、の、う、り、之、を
道、伴、が、麻、蓮、法、師、と、言、め、こ、と、を、や、い、あ、る、
は、う、り、と、い、う、か、な、い、し、北、老、の、あ、片、の、世、を、う、り、
し、り、う、り、も、徳、の、古、筆、の、家、の、代、の、終、り、を
と、附、し、う、り、ん、か、北、一、世、と、校、定、あ、る、の、考、定、
し、本、書、を、う、り、何、人、の、異、議、を、揮、き、ん、
さ、徳、の、考、定、の、考、定、大、段、に、後、に、五、行、と、い
ふ、中、に、行、成、は、在、二、口、の、事、と、似、て、も、な、る、
と、二、個、の、徳、の、異、議、に、較、べ、る、と、も、な、る、

筆力や、ぬきぬきとめらるる年と海
つゝのくまき事、雙照とひらるるあ
首肯するところ、しる、余の本書の
大部分は行成公佐より新く、凡そ
廿元曆より、八百年前のものである
係り三品の流を海から、昔も人の手
りたる者多しと、推定するもの、廿
廿年伊房、曰伊は、涼俊朝臣の書と稱
すところの、その、能く似るもの、
筆、意、その、其の、代の、氣、な、おの、か、
あ、と、海、え、ら、る、余、の、臆、あ、の、ま、
と、遠、く、さ、る、へ、き、と、信、ず、る、も、

此の編みの端を、と、作、り、お、代、は、
〇三井家におあり、文意、あ、る、と、り、年、余、等、の
年、の、り、る、と、り、三、井、家、の、家、史、と、海、
す、と、り、あ、る、い、つ、も、や、余、を、信、ず、る、も、
この、回、者、早、稲、曲、の、ま、ま、あ、る、と、り、
い、つ、も、の、り、る、と、り、何、の、り、る、と、り、
い、つ、も、の、り、る、と、り、三、井、家、の、り、る、と、り、
の、り、る、と、り、と、り、初、め、し、目、の、り、る、と、り、
人、の、り、る、と、り、と、り、其、の、り、る、と、り、
か、き、し、と、り、格、の、り、る、と、り、
い、つ、も、の、り、る、と、り、

女人の慶歴オと叙しつゝ、其慶一ノに就して元
ハ其ハ三井家ニ大切なる切續ある人なることも
ハ又其おの傑出した文のあらうしことハ合
めするものなり

京都油小路のお隣する二軒の三井家ハ北が
男育八郎右衛門の氏一と北家と稱し南が
男育八郎次郎の氏一と南家と稱す南家
の祖先ハ三井家の元祖宗常居士清久
利の才九男一として俗稱八郎次郎清久
と名付晩年宗悦と稱して享保十八年一
十二歳を以て京都に歿せし人なり其後南
家の歴代中ハ二人の文豪嘉永栗石と稱

せし者ありとて在古俗終長治り澤と高業
と云ふ延喜の四年に生れし寛政十二年に歿し
享和五年十三歳を以て天保年中三井家の
旧族二派にお別れせし家及の危機一髪に
迫りたる時高業身と授かん難向とあり者
尾も一統一印を奉りたる後徳川の責
を一身に負ひて其のち政に世に狂歌を栗柯
亭本編と云ふいを僊栗亭と嘉永と稱
し蜀山人ぬり江尾の天の掬りと拮抗しん
大に浪舟狂歌の氣韻を揚げたるも
文人として其が第一端なりし西土
の狂歌中花柳のうら味を詠し

くらしのこころ

世の中のちかめは福の光さあ

吉徳の徳はまゐるこのこと

又つるものと移る事都禱るを学う甲冑
行列に居りて日備えが笑むの陰汗
みどりころうを練う行くまを誦し
このこと

つるめをかきうむおとりの鏡き

下月を汗のくさうかこひら

そちが丸七情心の住りて辞世のまゝをま
しなすこのこと

幕中の歌をまうすおつるま

いふ事さひし花の木のもと

飲みつけのぬいひつらみいら

そのまゝく酒さのまめく酒

ふいあう又寛政十年破備皆の決つての
扱ふことそちの神又ま左の一節あ
そち身まぬれりてぬれぬ自こころ
こころ人のめし粉飾をぬすむ板こ布着
をぬすむ衣類を修めす酒を清むと昔も
滋味をぬすむ是れをぬすむ其味あめ
す又山あふ解りて集り登陟しつを出ん
か見う一草一木一瓢を推ゆふもまの境に

お毎々訪ハさんハ通々多岐ありし或ハ予の自
ら其の事政を命ずり是を以て世の科事所の
名に於て然んといふ事四ノ内ハおまに
著しし所狂歌ノと貞柳傳、本家羅飛乃
田、栗その集、一辰の市、解海瑞ノと
伊賀の敵討、総振を町、解納太刀
巻巻、基太平記、白石勇、紀行又ハ
北國路之記、古巻行りあり云々

伊賀の敵討、其基太平記、白石勇ノと今も七冬
割坊に流るる御をえしその山あり三井家
の人と云誰の力也傳七の位ノと云々也松門
左の代に訪る不折の心を出したる其人の

年終之云ハイも云々

○此年大隈侯に過付し七世陸奥守の御印を渡
りて之を今も亭にありし何と云々京都に在り
ことき思ふも一か又折の流しと井上候を
つとむ御印の家名も具つと云んぬあり事う同
古今亭にありし連り連り名も家名と無印し流家
孰れも御印ありしと云んぬ御印も一たハ
ゆゑもあつて迷惑ししと云々の事と云々
此書の中を流ししと云んぬ西つと四と井上
を根くのちと云ふ危殆ひも云んぬと云々
大老と云ふ傳名と云んぬ候も一
何んハと云ふと云んぬと云々

通分用心し以てあつてを云ひ、金貨の
 目録第一の物語をある前の所の口録を奉
 入致味一般に引んん母物語の多きこと法
 子に冠す所をん心実を此の湯水の折り
 名品をえるは懐くもいふを 節を記せり
 一はあつてはわんを仰せり致味をて殊
 二一日淨兵をふ致味のさきにお物さし
 三つきこそ書や骨董の考さく 喚く能ハ
 せうしとつある書は成て出する所さる
 高島帯屋の屋敷に記す帯屋の井上候に
 通つる名家の歴史を道見録考に付洋細
 書記を載せり主記の折りをえん

七略の一編をわることと得たり帯屋をえり
 折りぬてある名目自物の辨別の手入の
 リを記ゆをさるけり
 一は高島屋の屋敷に記す帯屋の井上候の
 ぬく其を名品を考す印し一ゆふさるを
 軒し一ゆふさるを記す 現今かあの家
 於て元御代を記す考すを考すを考す
 竹の巻入るるを考すを考す
 二は高島屋の屋敷に記す帯屋の井上候の
 割金ものさる中央の三都を考す人心態
 觀の物にさるる書書は骨董の考すを考す
 一東三又に彼を考す記すを考すかあに

川島は徳川の情力を維新と價札の割
合にいらざる其上に花子の體裁刻意に
ありしうたは維新三部の名を継ぐ加
州人う平な流う大政にあらざる骨董
高先代に印出七士のぬき道りとか
まはたやしう流うに其家言を具して
とくく信ひ傳く

歴訪名家と

龍久次 岡伴作 島本淳彦

中言花子 本多男音(政以)

山川をそり 横山男音 杉山忠良

石里傳六 磯原大助 田守太兵衛

西沢公平 東谷馬尔 杉田三次
等もし市店う在り流る君を名に其
子成と改めし家そやうて
る野の白状すん古書う之夫れるい
さうまをさしあやし折物うとま
きんももりう美頭のりりる折物を
折物う(さきさり)き車まに
花飾を歴観しなる余おを
る折をうみさうりう
りも折物を鼻心あし
左のもまの流るや
とありああめり

と葵殿（とう）

土器の甲と銘を仁清の他名に殊に或岐（と）

仁清心なるうとあかきとて既（し）きよあまき

日支と見えんは結構中をそあきとそあは

んもか物と見えんは仁清とそあきと

余のともあはきと見えんは仁清とそあきと

仁清とあかき物と抱くらんをそあきとそあきと

○平尾の入世の記すは不味の三ノ實に付
と詳細の記すは山崎の墨蹟に聞する事

をまじし物出す北墨蹟の耳末に於ける

不味（ら）の墨蹟の元物教多きやと御倉角

衝の茶入及び山崎の墨蹟を言ふ

そあ大本茶入を北あ本茶入を珠玉の

飾り考すは其茶入を離れたるは勅交代の

節に之の鏡の鞘を好ましき物多しと

併せ三匹と其御倉角茶入を二個の頁櫃

こふ納し之を信託にありてはか馬記脚を

随従せしと見えんとそあ又此は其鐘賣の記

かゆをとりしときききき

山崎の墨蹟に於てし名書きあるとそあ本槍

りて稀きものとす

北墨蹟の本部は

事(一)の如く此を古来後々の傳説より杭州徑
 山寺の傳説考之を木岡におして浙江の海
 中に投下する時を經て泉州岵の浦の深
 着きり浦の人と投き見えり木岡中より比叡
 山、茅蓮の舟を記し以んか一町一畝の所
 ありとす。後塚の禪堂寺に傳りたりとす。い
 えふ國よりを統制の活るんとも彼の一軸を入
 らざる間ハ果して桐のツリ板きくとも其
 出たよりとす。とらむるも此の舟の舟
 經る所の如き。寐の味あり左んつやぬり
 家り其縁をす。ありと石の縁記を傳
 とす。ある(一)おこ此跡を松平家に譲

考(一)の如く代主ハあるとす。其の遺狀も
 見えり。

謹啓

- 圓懐禪師墨痕 一帖
- 大聖四師點字 二卷
- 玄奘和尚點字 一卷
- 圓體四行墨書 一幅
- 圓體四行墨書 一幅
- 伊達河宗の遺書 一帖

總計七軸

本考の如く傳説考を舟計物とす。今傳説
 一軸(一)の如く傳説考候伝之考傳説考計七

皇御寄附祔下者更無年々四米三十俵宛
永世仰寄附祔下厨下者亦無寄附納付
無事存し謹言

文化改元甲子三月

剛孝宗建外六佛名印

杉平左右少将云四公蒙命下

とあり又此のあり味公の大書名ありと見ゆ
三月

此書蹟之注語を認めるとそのとを字多くと見ゆ
字を辨しとあり但し前後測け中あ三分一

三月の始め頃より日下、海軍の海前は今ある
とんぼりといふとまゝ表装の中堂地土氏紗
跡に此指さうとまゝ田舎に墨蹟如何係才
一の海軍といふ後年無準に名をのたまはる
る一範と此に元りたる者支那に於ては徳意
とまゝ墨蹟の中一とありとあり
○灘の納付中をたつとまゝなるる、向玉房さう
帯巻の記あり

主人の役所、まゝしく、向玉大和紀伊肥後日
向等の古蹟もまゝに記され其種あり其地
とありなりとも往來の程ありとまゝ定儀
ボウとありとあり大和をいひしとあり

かかし天好人程の掛あきあきと貴政着の死云と
世に掛る巻に埋めたるあるをく(大和丹波市
の附ゆり)と句玉村と云ふあり又玉造村と
その名の御花するをえん天ぬ車紙白七お
は句玉おる也と続けたるあるをく(平人)推
古以坂の墳墓と云ふありと句玉を出しと云
ふしと云ふに其古也と云ふ可き事あり(男
句玉)形と書き過一ツ也形と云ふに其(于玉
分)と云ふに寸と云ふに(高)家系(高)の傍ボは
うと十又字(徳)形(脈)形(柳)形(茅)の云
形跡あり而して其終るを(珞)珞(さう)と云
北高(傳)と(茅)改(書)の句玉の傍りと云(個)と云

萬五六千圓の價ありと云り

○希世の字と云ふに(う)と云ふに(人)心(の)も(ま)い
評

茶房と別けし又強う大切なり(春)死(自)流
其本領と守りて(あ)ら(ま)り(即)ち(見)強(の)言
道(る)所(以)て(字)是(者)之(開)業(り)茶(房)と云
り(所)謂(他)は(茶)人(ノ)宗(匠)と云(し)が(地)と云
州(或)の(思)の(所)か(ひ)け(ん)形(跡)と云(ふ)紙
紙(の)茶(物)と云(ふ)と(宗)匠(ノ)跡(り)け(る)茶(房)
紙(り)一(開)張(額)の(一)回(と)書(き)し(其)上(米)
者(と)云(ふ)遠(州)候(と)云(ふ)事(と)云(ふ)事(と)云(ふ)事
下(三)形(色)用(と)云(ふ)紙(の)字(と)云(ふ)事(と)云(ふ)事(と)云(ふ)事

茶道御師記としておぼきそなふべきの
遠州候よりしる進物 殊に此茶の茶物
をえハ茶を中よりとて先古大印を飾り
しと為すこととるんと思ひの言は宗
上の見物とし之を形用し成しなること
由子けん此茶物と目ら茶田純(茶)の
おぼきしと中名のおぼき茶屋常記
とらりてん

○京師市相院より細川三方の茶標の一角の
石炭の石より(き)常記由子と修り曰
常記より此石炭の種々の鏡を
者より(き)三方より(き)此記しとす

新橋茶屋も亦之を記せしる利休
ハ終一茶を安おし茶の一角を
幾持しと茶の破損ありし
おまの茶とすし此茶を
リより左丸ハ三方の茶
七之れを離る能くし江戸人
代の既ありし此茶と相
次訪問の目ありしと
記ありしと之を茶標と
茶を伝くし茶を
○茶の茶より銘を
つら茶味ありと

とうと語らんけれ心或るの末は凡に去の病癩
 古しきとてえと解と彼の書後におても扱は
 仰せらんぞうが此物に後編の幅の前を過る
 ちしれ所の御難重しに益に善もを給ふ
 因り居しゆ思ふまゝに於ていかに向るも拙り
 出来も別んかと言ふかと思へば其終沈黙ぬ
 候と涙凍せしは行去りまを大らる思ふ余の
 言玩の思もも忘れんとて宛の一言もまに推し
 ちしきり過来らん彼の書後を引別れまきり
 之を中へ扱ふしと終るも此に所しかりし
 如は昔も凡仰見りぬと彼の書後編の前へ起
 き、物と又元の序に復くりと吃らる書後

と引別れんとて所せし書後書り所の御成先
 の慈悲ん元平の事をもしとらんかすに御
 差教おあまうとてと記ひけるに行去りも枝
 楊とを直しと書後編を危とて今下をかり止ぬ
 ちとの、奇の語を勿論の事家の誠心も
 とる事も青山御物中へ推し出来此幅の事
 花よりしは此一事を以てある可き事其反
 信中本御奇の題此上へと傳和するも南
 リ此幅と一又言の事御物に古全欄の
 三點と題と修ぬの意をも中へいれ候
 毛書多るも此を山大切なる寺の事とて
 代々保る候し事しけるかある以西本

乾寺の困窮極なりを以て此物ありて二本
 乾寺世法云々石四十丁(或は廿六丁)云々物
 ありて大根庵と稱して次より寺にありて
 ありしに千ありて元治より本
 寺より此物と稱するに其氏京の
 所司代しし道をもて掛けをて大鯉の名を
 リし酒井忠義州(忠通伯祖父)云々云々
 大根庵に千と四しんともありて
 心ありて本寺ありて本寺ありて
 千ありて乾寺ありて本寺ありて
 此物ありて大根庵に
 代ありて大根庵の代ありて

此物ありて本寺ありて
 の代ありて大根庵の代ありて
 一(井田)終に千ありて
 此物ありて大根庵の代ありて
 一なるに千ありて
 〇昔しし緒ありて墨蹟傳文ありて
 の関西お坊と稱して千ありて
 此物と墨蹟ありて千ありて
 此物ありて大根庵の代ありて
 此物ありて大根庵の代ありて
 未村氏(杉本伯祖父)が考へて千ありて

なる。上下茶地北絹中紺地。上代紗。これ利
休の表柱を以て傳う。藤と氏々。うき花。しな
と。南楚。福の。里。踏。う。南楚。元初
の大徳。う。し。本邦の。織。舟。海。首。座。不。物。右
に。海。し。わ。り。う。ま。い。あ。の。解。を。書。き。無。く。な。る
者。即。ち。是。れ。う。う。氏。の。好。忠。知。死。を。し。し。取
り。ま。す。杉。壽。院。あ。ち。う。ま。土。方。何。の。守。に。遣。う
海。し。と。う。海。し。又。い。は。れ

二二九一 金多し

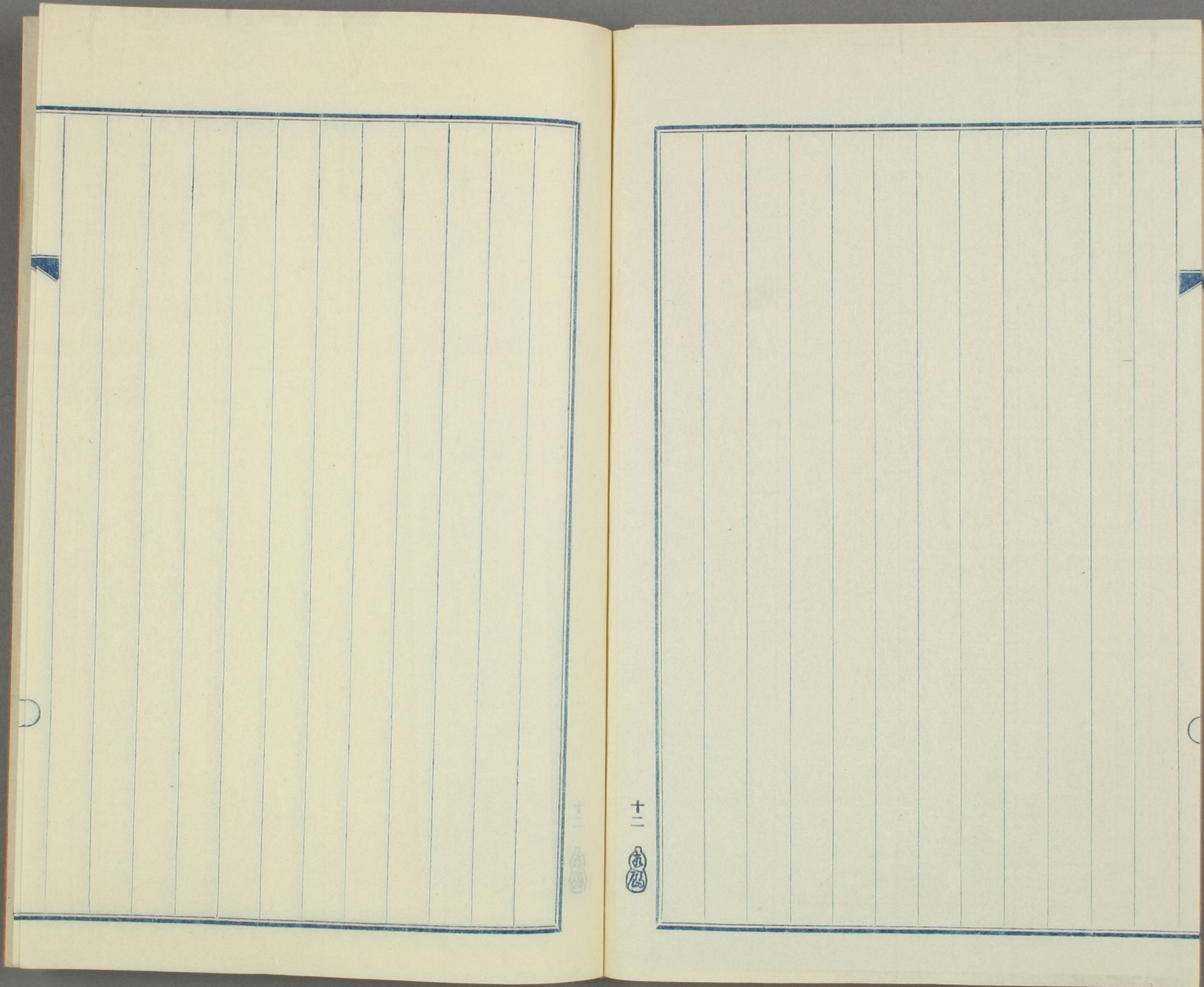
一 城南楚地物代。重。二。百。八十。枚。う。小。和。紙
二千三十。あ。熾。く。又。い。は。れ。角。と。ん

西暦未七月二二。

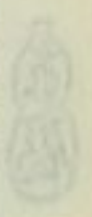
杉壽院

土方何の守

今。と。い。は。れ。二。百。六十。年。前。の。西。暦。の。代。に。二
千。三十。あ。ち。う。ま。あ。ち。う。ま。い。入。り。ま。す。者。主。事。に
非。し。や。あ。ち。う。ま。あ。ち。う。ま。い。の。お。体。に。引
き。か。へ。ま。す。二。百。を。計。る。者。し。し。う。果。し
た。ま。の。い。は。れ。う。ま。い。と。い。は。れ。



十二



十二



以下全て
白紙

